ドストエフスキイ研究会便り（１０）

カラマーゾフの世界

（A）.兄弟たち、スメルジャコフを巡って
― スメルジャコフとマリアとアリョーシャ ―

5.ドミートリイの「裸形の曠野」　　［第八篇2より］

はじめに

今回は長兄ドミートリイを取り上げたい。イワンの思索性、スメルジャコフの悲劇的悪魔性、アリョーシャの聖性に対して、ドミートリイの情熱と生命力は圧倒的なものであり、ドストエフスキイの筆はこの青年を描く時、他のどの登場人物たちの場合とも違って饒舌となり、活きた弾みのある筆使いとなる。恐らくドミートリイとは、作者自身の生の生地に最も近い存在だったのであろう。

「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちのドラマ。我々はこれが『カラマーゾフの兄弟』の主骨格をなすと考え、それをイワンとスメルジャコフ、そしてアリョーシャに即して追ってきた。ドミートリイもそのドラマを生きる一人である。だがこの青年が生きるのはカラマーゾフ的生命の爆発の現場であり、具体的には身も心も灼き尽す恋愛の修羅場である。「俺の額を氷が灼いた」。これはカチェリーナの美との対決から発された言葉だが（三３）、既に「詩」そのものである。人間の心とは美を巡り悪魔と神が戦う戦場だと述懐し、女性の美を命賭けで求めるこの青年を、ただ父親譲りの「好色漢」だと規定してみても、その本質を言い当てたことにはならないであろう。

巧まずして「詩」を生きるこの青年を捉えるにあたり、我々はまず彼を掻き立てる情熱、「美と崇高なるもの」を求めるシラー的ロマンチズムに焦点を絞りたい。そのロマン主義的心情の最大の特徴は、彼自身が言うように、美を巡り神と悪魔とが相争う戦場としてあることだ。だがドストエフスキイはドミートリイのこの両極性を、単に青年のロマン的詩的心情の表現としてではなく、その内に荒涼索莫たる「裸形の曠野」を抱えた魂の分裂の問題としても捉える。つまりこの青年の「崇高さ」と「汚辱と恥辱」との分裂を、一人の青年の魂の成長史の内に捉え、更にはそれを宗教的弁証法的ドラマとして展開させるのだ。

ここから見る時、彼の「父親殺し」を巡るドラマは、ただ単に女と金を巡る父親フョードルとの「骨肉相食む」争いに終わらず、「神と不死」を巡る「ロシアの小僧っ子」のドラマとして、イワンやスメルジャコフやアリョーシャのそれとも深く交錯し合うことが明らかとなるであろう。更に彼の歩む道がイエス・キリストと神理解の深化の道であることも浮かび上がり、我々はこのドミートリイもまた他の兄弟たちと同じく、「絞首台への道」か「十字架への道」かの岐路に立たされていること、またこの青年が我々の追い続ける「罪なくして涙する幼な子」の問題とも深く関わる存在であることにも気づかされるであろう。

5.ドミートリイの「裸形の曠野」　　[第八篇2より]

目次　　ページ

1. 「裸の畑」との出会い　　―「絶望」と「死の気配」―　　２～７
2. 三千ルーブリ金策の旅　　―「猟犬」を探して―　　７～９
3. 父親殺し　　―カラマーゾフ的パノラマの展開―　　９～１４
4. モークロエ村で　　―「餓鬼」、「罪なき幼な子」との出会い―　　１４～２１
5. カラマーゾフ世界の宗教的覚醒体験　　―イエス像に向かって―　　２１～２５
6. ドミートリイの新たな曠野　　―遠きに輝く「太陽」―　　２５～３２

1.「裸の畑」との出会い　―「絶望」と「死の気配」―

三千ルーブリを求めての二日間、ドミートリイの金策の旅は全くの徒労に終わる。その目的や具体的な経緯は後で確認することにして、我々はまずこの旅の終わり、ドミートリイの目の前に広がった光景について、筆者の記すところを見ておこう。

> 「彼は森の細い小道を、《無に帰してしまったアイデア》を抱え、呆然として途方に暮れ、自分が何処に向かっているのか意識もせずに歩いていった。今の彼ならば行きずりの子供でさえ打ち負かすことが出来るだろう。それほどまでに、身も心も突然衰弱してしまったのだ。それでもどうにか森から抜け出ることは出来た。すると突然目の前に見渡す限り広がったのは、刈り入れの終わった裸の畑であった。《なんという絶望だ。至るところ、死の気配のみだ》。更に前へ前へと歩き続けながら、こう彼は繰り返すのだった」（八２）

『カラマーゾフの兄弟』において、主人公の一人一人が何らかの形で直面させられる「裸の畑」。それは目の前に広がる「刈り入れの終わった」文字通りの「裸の畑（アプナジョンヌィ・ポーリ）」であるばかりか、彼らの心の内に広がる「絶望」と「死の気配」のみが支配する「裸形の曠野（ゴーラヤ・ステッピ）」（九８、p. 17）でもある。四人の兄弟の中でも最も躍動的な生命の爆発体と言うべき長兄ドミートリイ。何がこの青年をこの「裸の畑」、荒涼索莫たる「裸形の曠野」との直面に追い込んだのか。

裸の畑に至る道

目の前に果てしなく広がる「刈り入れの終わった裸の畑」の中を、呆然として歩き続けるドミートリイ。ここに至るまでのドミートリイとは、何とかして三千ルーブリの金を手に入れようと、まずは町の商人サムソーノフを訪ね、続いて森の売買人ゴルストキンを探し出すべく必死に奔走を続け、漸く辿り着いた森の番小屋では危うく一酸化炭素中毒で死にかかるド

ミートリイである(八１・２)。更に翌日「無に帰してしまったアイデア」に代わり、新たに「確かな計画」を胸に家畜追込町に戻ってきた彼がホフラコワ夫人から提供されるのは、今度は途方もない「金鉱探し」の夢である（八３)。―― これら延々と続けられる三千ルーブリを求めての奔走は、『カラマーゾフの兄弟』の中でも恐らくは最も読者を辟易とさせる悪夢のような彷徨であり、ドミートリイの笑止千万な茶番劇と言うしかない「地獄巡り」である。だがこの熱に浮かされたような彷徨の姿にこそ、善かれ悪しかれ、ドミートリイという青年の全てが象徴されているとも言えるであろう。

「熱烈なる魂の告白」

ドミートリイがかくまでも三千ルーブリの金を必要とする理由。これは作品の前半第三篇において、彼自身がアリョーシャを相手に延々と「告白」するところである。筆者はそれらを「熱烈なる魂の告白」と題して、三章にわたって紹介する（三３・４・５)。それら三つの「告白」のどれもが、本来はゆっくりと立ち止まって味読すべき芸術的感興と洞察に満ちたものである。ここではそれらに気を配りつつも、まずはドミートリイが三千ルーブリの金策の旅に行き着く経緯を明らかにし、彼の生活史を浮き彫りにすることを第一の目的としよう。

第一の「告白」

彼の第一の「告白」は三段階で語られる。まず冒頭に置かれるのは、「美と崇高なるもの」への熱烈なシラー的憧憬だ。これは「詩に託して」という表題が示すように(三３)、恐らくはドストエフスキイが「ドミートリイに託して」表現した、彼自身のロマン主義的心情の表明でもあるのだろう。青年時代以来、彼はシラー的ロマンチズムに胸を高鳴らせてきた人である。進んで次にドミートリイが語るのは、自己の内なる「悪臭と汚辱」についての「告白」であり、ロマン主義的心情が現実に抱える矛盾・分裂の正直な表明である。最後に語り出されるのは「マドンナの理想」と「ソドムの理想」との葛藤について、つまり人間の心とは美を巡って神と悪魔とが戦いを繰り広げる戦場であるとの「告白」、というよりは驚くべき「洞察」の表明だ。ドミートリイという人物が、人間の心の深淵とそこに潜む謎を凝視する鋭利な思索家でもあることがここに明らかとなる。この詩人かつ思索家は、自らの金策の必要性を、このように高らかで大掛かりなロマン主義的「告白」の形を取って表明するのである。

第二の「告白」

ドミートリイの第二の「告白」は、軍人としての地方勤務時代の「秘話」を巡ってなされる。つまりここでは彼の上官の娘である絶世の美女カチェリーナとの出会いから、恋の駆け引き、そして彼女との息詰まる「対決」、更には思いがけぬ婚約に至るまで、これらのドラマチックな経緯が一気に語られるのだ(三４「秘話に託して」)。

圧巻は父親の作った借財三千ルーブリを借り受けるべく、密かに部屋を訪れたカチェリーナを前にして、ドミートリイが自らの内なる「虫けらの情慾」と戦い昇華させる場面である。これはカチェリーナの美を巡り、彼の心の内で繰り広げられた神と悪魔との戦い、そして神が勝利する瞬間の高らかな報告書と呼ぶべきものである。更にカチェリーナが感動のあまり、ドミートリイの足元に身を投げ跪拝する場面。そして彼女が去った後、生の歓喜の極、死を思い立ったドミートリイが軍刀を抜き、その刃に接吻をする場面。――これら一連の場面は息を継がせぬ圧倒的な迫力を以って描き出され、読む者の胸を打たずにはいない。ドミートリイが「俺の額を氷が灼いた」と言う二人の「対決」は、ドストエフスキイ文学全編の中でも白眉と言うべき文学的感興に満ちた場面である。恐らくはこれもまた第一の「告白」に続き、ドミートリイとカチェリーナ二人の「秘話に託して」語られた、作者自身の絶対美との出会い、彼自身が自ら体験した、美を巡る神と悪魔との壮絶な戦いの回想であり、「告白」なのであろう。

第三の「告白」

そして最後の第三の「告白」。これは婚約者カチェリーナを措いての、家畜追込町におけるグルーシェニカとの出会いと、問題の三千ルーブリの必要が如何に生じたかについての経緯の「告白」である（三５「真っ逆さまに」）。ドミートリイの「告白」はシラー的ロマンチズムの高みから、カチェリーナとの「秘話」を経て、いよいよ地上的泥沼の現実へと「真っ逆さまに」転げ落ちてゆく。

「雷が轟いたのだ」「全てが終わってしまったのだ」。これら如何にもドミートリイらしい大仰な言葉と共に明かされるのは、何よりもまずグルーシェニカとの運命的な出会いと彼女への熱烈な愛についてであり、また更に具体的で切実な問題、彼が抱えることになった「悪臭と汚辱」の現実についてである。実はドミートリイはカチェリーナから預かった三千ルーブリの半分を、家畜追込町の近郊にあるモークロエ村で、グルーシェニカとの豪遊に使ってしまっていたのだ。残りの半分は、来るべきグルーシェカとの逃避行に備えて、また自らの「名誉と誇り」のために、密かに布の小袋に入れられ、首から吊るされていた。だが彼は逮捕後まで、胸の小袋のことは誰にも明かすことはないであろう。

かくしてドミートリイが立てた目算とは、まず三千ルーブリを母の遺産を独占する父から奪い返し、それをカチェリーナに返却して別れを告げ、グルーシェニカとの新たな生活に乗り出そうというものであった。三章にわたって繰り広げられたアリョーシャへの「告白」とは、とどの詰まりこれら全てを弟に「使い走り」してくれるようにとの「依頼」だったのだ。三千ルーブリの金策の旅と同じく、この「告白」もまた、この青年存在の全てが、プラスにせよマイナスにせよ、そのまま象徴的に表出されたエピソードと言えるであろう。これらから浮かび上がるのは、決して透明で済み切ったドミートリイの精神模様と言えるものではない。我々の前に曝されるのは、混沌として煮えたぎる彼の情熱の爆発であり、しかもそれが行き着く先とは「マドンナの理想」と「ソドムの理想」との分裂、否

むしろ既にグルーシェニカという「ソドムの理想」に傾いた心の「告白」であり、彼女を得ようとの強烈な願望とその策略の提示とさえ言えるであろう。

ドミートリイの情熱の光と闇

この青年の内で燃えたつ情熱。「美と崇高なるもの」を希求するシラー的情熱の激しさと熱さ、そしてそれがもたらす劇的体験と洞察の鋭さと深さは、繰り返しとなるが、読む者の心を揺り動かさずにはいない。だが同時にそれはカラマーゾフ的生命力の過剰さと身勝手さの表出でもあり、ともすれば我々読者を辟易とさせる我執の爆発でしかないとも言い得るのだ。その情熱は感動的悲劇的ドラマを生むと共に、喜劇的でもあり、時に悪魔的相貌を呈するドラマとしても展開するのである。

その否定的側面の延長線上にあるのが、ドミートリイが退職官吏スネギリョフを公の面前で侮辱した、あの「垢すりへちま事件」である（前回第４章3）。更に思い起こすべきは、この兄に対してなされたアリョーシャの厳しい宣告のこと（同6）、そして終局「イリューシンの石」の前で、アリョーシャの魂を揺るがした「激震」のことだ（同6）。イリューシン少年を死に追いやる原因の一端を担ったのは、グルーシェニカの美を前に、シラー的情熱の虜となったカラマーゾフの若旦那ドミートリイの身勝手で無思慮な行動だったことを、我々は忘れてはならない。

だが我々はドミートリイについて、余りにも性急に最終的な「宣告」を下すことは避けよう。そして今までの他の三人の兄弟の場合と同じく、作者ドストエフスキイがこの青年に与えた光と闇の運命を、まずは正確に見届けるよう努めよう。筆者が提供する様々なデータの中には、ドミートリイがかくも必要とする三千ルーブリについて、本人の「告白」以外にも、看過することの出来ない情報も幾つか存在する。そこからは彼の恋敵である父親のフョードルや、異母兄弟スメルジャコフの姿も浮かび上がってくるであろう。我々は若旦那ドミートリイの天翔ける情熱が、これら大旦那と下男二人が取り憑かれたそれぞれの悪魔的情熱に巻き込まれ、遂には地に墜（お）とされる経緯（ドラマ）についても確認しておかなければならない。

恋敵フョードルの三千ルーブリ

まずは父親フョードルである。イワンによれば、七十歳どころか八十歳までは「男でいる」ことを宣言するこの「好色漢」にとって(五３)、いや増す年齢の負荷（ハンデ）を補うものは、その老獪な知恵と共に何よりも金である。息子に劣らずグルーシェニカに首ったけとなったフョードルは、もし彼女が家を訪れるならば三千ルーブリを提供しようと密かに申し出ていたのである。しかもこの事実をドミートリイにもたらしたのはスメルジャコフであった。猛烈な嫉妬と危機感の虜となったドミートリイが考えたこととは、今確認したように、アリョーシャに全てを「告白」した上で、この弟を父の許にやって金の提供を申し出させ、次にその金をカチェリーナの許に届けさせ、彼女に別れを告げさせようというものであっ

た(三５)。「天使」に使い走りをさせようというこの虫のいい試みは、当然のことながら失敗し（三９）、ドミートリイは自ら三千ルーブリの金策に乗り出す。それがあの「裸の畑」との出会いの旅である。

殊に注意すべきは、彼の金策の旅の出発点にスメルジャコフの影が見え隠れしていることだ。ドミートリイは性格的にも境遇的にも、異母兄弟のイワンとスメルジャコフとは大きく異なり、彼らの生が直接深く交わることはまずないように思われる。だが実際にはこの若旦那は、密かにスメルジャコフを隣家の庭にある四阿に呼び出し、父親やグルーシェニカの動静について逐一探らせ、聞き出すなど、この下男を自分の手先のように使っていたのである。だが後に見るように、下男を脅して言いなりにさせる若旦那の方こそ、実は相手の思う壺に嵌まっていたのだ。この点ではスメルジャコフを「前衛的肉弾」としたもう一人の若旦那、イワンの場合と事情は全く同じである。これら三人の関係、あるいは力関係は、そう容易に判断できるほど簡単なものではないのだ。

思い出すべきは、隣家の娘マリアとの逢瀬の場でスメルジャコフが、己の運命への強い憎悪と呪いを表明した際に、イワンとドミートリイについても手厳しい批判をしていたことだ。この時スメルジャコフは若旦那イワンを、自分のことを「悪臭漂う下男」であり、今にも「謀反」を起こしかねない奴だと語ったとして指弾し、このモスクワ帰りの英雄であり師に対して既に冷徹な目を向けていることを暴露していた。更にもう一人の若旦那ドミートリイについても、品行と頭の程度と懐の中身のどの点から言っても、どこの下男にも劣らず「空っぽ」でありながら、この若旦那は誰からも尊敬されるとして血祭りに上げていたのである（第１章3、第２章6）。

また注意すべきことだが、フョードルがグルーシェニカに提供しようとした三千ルーブリについても、この情報をドミートリイに齎(もたら)したのはスメルジャコフである。これにまんまと引っ掛かったドミートリイは、猜疑心と嫉妬心に捕われた末にアリョーシャへの「告白」を試み、その果てにあの悪夢のような金策の旅に乗り出すのだ。後に見るように、この旅の失敗によって彼の心は更にかき乱され、狂乱状態で父親の許に駆けつけるであろう。己の運命に対する憎悪と呪いに憑かれたスメルジャコフが投げた網は、父親フョードルばかりか、自分を下男としてしか扱わない二人の異母兄弟をも捕え、着々と終着点に向かって引き絞られ、手繰(たぐ)り寄せられつつあったのだ。

三度にわたる「告白」を始めとして、ドミートリイに関する様々な事情を確認した今、我々はこれらを踏まえ、冒頭で見た「裸の畑」に至る彼の旅を、駆け足ではあるが、改めて追ってみることにしよう。二日間にわたって延々と繰り広げられる滑稽以外の何物でもない金策の旅、読む者を辟易とさせる悪夢のような徒労の旅。――『カラマーゾフの兄弟』の読者の多くが読み飛ばしてしまうこのドミートリイの旅とは、何よりもこの青年存在の肌触りを直に知り、また「裸の畑」の更に奥に横たわる彼の「裸形の曠野」を知る格好の場であるばかりか、ここからは作者ドストエフスキイが作品構成にあたって駆使する卓越

した文学的芸術的技量と、それを介した宗教的思索の奥行きと深みも浮き彫りにされてくるであろう。

2. 三千ルーブリ金策の旅　　—「猟犬」を探して—

恋敵の父親フョードルが密かにグルーシェニカに提供を約束した三千ルーブリ。先に見たように、スメルジャコフがこの情報をもたらすや、ドミートリイは猛烈な危機感と嫉妬心を掻き立てられる。弟アリョーシャに事情の一切を「告白」し、使い走りをさせようとの目算が外れるや、彼は自ら金策に乗り出す。彼がまず試みたこととは、長い間グルーシェニカのパトロンであった富裕な商人クジマ・サムソーノフの許を訪れることであった。この男に母が残したチェルマーシニャ村の所有権を売り渡そうとしたのである。家畜追込町から約八十露里離れたチェルマーシニャ村、この村が自分のものだと主張するドミートリイはサムソーノフに訴える。—— 自分は三か月前に或る書類を持って(筆者はその法的正当性は疑わしいと記すのだが)、県庁所在地の弁護士の許を訪れ、既にこの土地の所有権は確認済みである。この土地は三万ルーブルの価値はあり、今まで父から受け取った「一万七千ルーブリ足らず」の金額を差し引いても、まだ相当の残額はあるはずだ。それを今日、三千ルーブリで引き取っては貰えないだろうか。

眉唾ものの土地売買の話と共に、眼前でグルーシェニカへの愛を臆面もなく表明するドミートリイに対して猛烈な嫌悪感を、そして恐らくは嫉妬心をも掻き立てられたのであろう。サムソーノフはこの青年に一杯食わせてやろうと謀る。—— チェルマーシニャ村には今ちょうど、綽名がリャガーヴィ［猟犬（イヌ）］いう森の売買人が来ている。この男は今、お宅の父親フョードルと森の売買のことで揉めていて、この件で私に知恵を貸して欲しいと言ってきている。彼はイリインスコエ村の神父イリインスキイの許に滞在しているのだが、この村はヴォローヴィア駅から十二露里ほどしかない。お宅の父親が乗り出す前に、お宅自身がすぐに交渉に出かけ、話をつけてしまうとよいだろう。

ドミートリイは小躍りをして喜ぶ。小旅行に必要な金をかき集め、彼がヴォロホーヴィア駅に向けて馬車で出発したのは正午過ぎであった。鉄道駅ヴォローヴィヤへの到着後、ドミートリイはここから田舎道に入り、イリインスコエ村へと向かう。(ドミートリイと会うことの出来なかったイワンが、料亭の「みやこ」でアリョーシャに「大審問官」の叙事詩を語り聞かせていた頃と考えられる)。だが駅からこの村までは、サムソーノフが言った十二露里どころか、十八露里も離れていた。おまけに村にイリインスキイ神父はいなかった。疲れ切った馬でようやく隣村に辿り着き、ドミートリイが神父を探し当てた時は、ほとんど夜近くなっていた。ところが神父の説明によれば、なんと肝心の「猟犬」はスホーイ・バショーラクという村に行っていて、そこでの森の売買のため、今夜は森の番小屋に泊まる予定だという。ドミートリイはこの神父に森の番小屋まで連れて行ってくれるよう

頼み込む。道すがら神父は忠告する。相手を「リャガーヴィ［猟犬］」と呼んではならない、「ゴルストキン」という名前で呼ばないと相手にされないだろう。神父はサムソーノフの悪意に気づいたのだが、ドミートリイにはこれ以上のことは言わなかった。二人が一露里どころか三露里はある道を歩き通し、ようやく森の番小屋に辿り着いた時、既にゴルストキンは酒に酔いつぶれ、鼾をかいていた。朝まで待つしかない。覚悟したドミートリイは、「恐ろしく深い憂鬱」に捕われつつ、暖炉の脇のベンチに腰を下ろす。疲れ果てた彼もまた、いつの間にか深い眠りに陥っていた。―― 延々と続くドミートリイの金策の旅。我々はこのまま、もう少し追っておこう。

真夜中のことだ。ドミートリイは耐え難い頭痛で目を覚ます。暖炉を焚き過ぎた小屋の中に一酸化炭素ガスが充満し、自分もゴルストキンも中毒死をしかかっていたのだ。森番を呼びに行き、窓を開け、部屋の換気をし、通風管を開けたものの、泥酔したゴルストキンは依然眠り続けている。(イワンが階段の上から息を殺してフョードルの様子を窺うのはこの夜のこと。またゾシマ長老が最期の息を引き取るのも同じ夜のことだ。夜明け前、長老の死体は強い腐臭を発し、修道院から町を巻き込んでの大醜聞を引き起こすであろう)。

翌朝九時頃のことだ。ドミートリイが目を覚ますと、既に「猟犬」は起き上がっていた。だが何とこの男は、またも「取り返しがつかない」完全な泥酔状態にあったのである。サムソーノフの名前を出しても、森の売買のことを説明しても、最早全くの無駄であった。筆者はドミートリイが何かに頬を殴りつけられ、突然心の眼が開かれたような心地がしたと記す。

「松明に火がともり、俺は一切を理解した」(八２)

旅の終わり

三千ルーブリを求めての憑かれたような二日間の旅。漸くドミートリイはこの一切が、サムソーノフの策謀に乗っての無駄骨であったことを悟ったのだ。冒頭で見たように、彼は森を抜け、目の前に広がった「裸の畑」の中を歩き続ける。(父フョードルの依頼を受け、イワンがチェルマーシニャ村に向けて発った後、いよいよスメルジャコフが癲癇の発作を起こすのはこの頃のことであろう)。駅馬車に拾われ、辿り着いたヴォローヴィヤ駅での腹ごしらえ。生気を取り戻した彼が駅で馬車を雇い、ようやく家畜追込町への帰還を果たしたのは夕刻であった。(イワンが父の依頼を無視してチェルマーシニャには行かず、この鉄道駅からモスクワに向けて発つのは夜七時のこと。兄弟はどこかで互いの途を交錯させていたことになる)。町に帰り着くやグルーシェニカ宅に駆けつけたドミートリイは、彼女の「無事」を確認すると、今度は新たにホフラコワ夫人宅を訪れる。町への帰途、彼の頭には新たに「確かな計画」が浮かんでいたのである。(ドミートリイの訪問後、グルーシェニカ宅を訪れるのはアリョーシャである。この青年は長老が発した「余りにも早過ぎる、余りにも強過ぎる」腐臭が人々の間に引き起こした醜聞に絶望し、ラキーチン記に導かれ「毒

を喰らはば皿までも」と、「毒婦」グルーシェニカの許に乗り込むのだ)。

さてホフラコワ夫人宅のドミートリイである。期待に胸を震わせる彼に対し、夫人が「リアリズム」の名の下に滔々と語り聞かせたのは「金鉱探し」の夢であった。「裸の畑」への旅に続き、これもまたドミートリイが体験するもう一つの悪夢に他ならない。だがこの夢物語については、もう省略しよう。

「裸の畑」の「リアリズム」

「裸の畑」に向かい、果ては「金鉱探し」に向かい、二日間にわたって繰り広げられた悪夢のような遍歴の旅。母親譲りのロマン主義的心情が脈打つドミートリイの心の底には、「美と崇高なるもの」を求める魂の飛翔とは逆に、このような「裸の畑」の光景や途方もない「金鉱探し」の夢の数々が、恐らくは幾重にも幾重にもその残骸を沈殿させていったのであろう。そのような青春の地層の中に、森の番小屋に充満した一酸化炭素ガスに劣らず忌まわしい「絶望」と「死の気配」もまた忍び込んでいなかったと誰が言えよう。

完全な徒労に終わるドミートリイの金策の旅を、三章にわたって「これまでか、これまでか」とばかりに記すドストエフスキイの「リアリズム」は、アリョーシャへの「告白」の三章と相俟って、この作品の正にアンチ・クライマックスを形作る見事な文学的達成とであり、我々はこの旅を「ドミートリイの地獄巡り」とさえ呼び得るであろう。それは長大な「大審問官」の劇詩の前にイワンがアリョーシャに語り聞かせる、簡潔で感動的な古詩「聖母の責苦(地獄)巡り」(次の3) と好対照をなすものだ。我々読者はこの旅に寄り添うことで、ドミートリイの内に吹き荒れる情熱の激しさと同時に、その実りのない不毛さの前にも立たされる。つまりこの青年の底知れぬ情熱が行き着く「裸の畑」という現実と、そこを支配する「絶望」と「死の気配」の不気味さに触れさせられる我々は、彼が内に抱える「裸形の曠野」の拡がりとその問題の奥深さに思い至らされるのである。

3. 父親殺し　　―カラマーゾフ的パノラマの展開―

父親殺し、罠

家畜追込町に戻ったドミートリイがホフラコワ夫人宅を訪問する前後、つまり嫉妬心と猜疑心に駆られた彼が、グルーシェニカの動向を必死で追う詳細については省略しよう。ここにあるのもまた、大騒ぎの内に繰り広げられる喜劇的狂乱劇であり、最後に我々が見出すのは、グルーシェニカが父フョードルの許に走ったと思い込むドミートリイである。

狂乱状態で父の家に駆けつけるドミートリイを、息を殺して待ち構えているのがスメルジャコフだ。偽の癲癇発作を起こした彼は、計算通り、グレゴーリイ夫婦の部屋に運び込まれ、衝立で仕切られたベッドに寝かされていた。スメルジャコフを愛する夫婦は、彼が癲癇発作を起こした時には、常にここに寝かすことにしていたのである（十一８）。先に確

認したように、スメルジャコフは三千ルーブリの提供に関する情報以外にも、グルーシェニカが密かにフョードル宅を訪れた際にする相図(ノック)について、また三千ルーブリの隠し場所について等々、若旦那に必要な情報は予め全て吹き込んでおいたのだ。父親殺しのお膳立ては用意周到に整えられ、後はただドミートリイが罠に誘き寄せられ、最後の一撃を振り下ろしてくれさえすればよかったのである。

さて忍び込んだ庭の闇からドミートリイが見出したのは、灯りに照らし出された部屋であった。そこには一人、グルーシェニカを待ち侘びるフョードルの姿があった。彼女が来ている気配はない。だが憎しみと嫌悪感の塊となったドミートリイは、突然銅の杵をポケットから取り出す・・・

スメルジャコフの計算通りに運んでいた事態は、ここで突如その方向を変える。「神のご加護で」(八４)、または「誰かの涙」か「神への母の祈り」か「聖霊の接吻」によって(九５)、あるいは「守護天使の救い」によって(同)、ともかくドミートリイは父親殺しを思い留まったのである。だが折しもこの時、病の床にいたグレゴーリイが突然目を覚まし、いつもの律義さで屋敷の戸締りの点検等を思い立つ。闇の庭の中、前方を走り抜ける不審者の姿を認めたグレゴーリイは、石塀を乗り越えようとしたその人物の足にしがみつく。それはスメルジャコフが産み落とされた風呂小屋の裏手であった。「親殺し！」。闇に叫び声が鳴り響く。咄嗟にグレゴーリイの頭を銅の杵で打ち払ったドミートリイが次にとった行動とは、庭の外に飛び降りて逃げ去ることではなく、塀からもう一度庭へと飛び降りることであった。育ての親グレゴーリイを殺してしまったのかどうか、確かめようとしたのだ。叩き割られた頭から噴き出る血を拭ってやりながら、彼が至った結論はこうであった。「どうせ同じことだ」「殺したものは殺したのだ」(八４)。

一方グレゴーリイの叫びを耳にしたスメルジャコフは、床の中で待つことに耐え切れず、庭に飛び出す。部屋で怯えるフョードルの姿を確認した後、庭の闇の中に彼が見出したのは、意識を失い血まみれで横たわるグレゴーリイであった。計算が外れたことを知って、スメルジャコフは一瞬の内に決断する。グレゴーリイが意識を回復する前に、またマルファが目を覚ます前に、「正に今、この場で、一切のけりをつけてしまおう」(十一８)。ドミートリイの杵に代わってフョードルの脳天を叩き割ったのは、スメルジャコフが手にした文鎮であった。

ここに開始されるのは『カラマーゾフの兄弟』の後半を貫く縦糸、「父親殺し」を巡る懼るべき罪と罰のドラマ、ゾシマ長老がイワンに語った「悪業への懲罰(カラ)」(二５)現前のドラマである。つまりドミートリイが、イワンが、そしてスメルジャコフが、それぞれの「父親殺し」の罪との対決に追いやられ、その罪意識を介して良心に臨む神との対決を迫られてゆくのだ。我々はイワンとスメルジャコフ二人に対する「悪業への懲罰」と、それに続く神との出会いについては、既に前々回に確認してある(第３章4・5・6)。スメルジャコフについては、アリョーシャとの関係で、なお次回第６章でも検討しよう。(「天使」アリ

ョーシャが、霊の父ゾシマ長老の死と腐臭の発生にあたり犯した「罪」については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』Ⅶ-Ａを参照されたい)。

「虫けら」の死の必要

さて育ての親グレゴーリイを殺害してしまったと思い込み、その場から逃げ出したドミートリイのその後である。血塗れのままグルーシェニカの住まいに駆けつけた彼は、女中のフェーニャから女主人がモークロエ村に向かったことを聞き出す。グルーシェニカの心を占めていたのはドミートリイでもフョードルでもなかった。五年前、自分を棄てて去ったポーランド人将校だったのである。思いも掛けなかった事実に直面させられ、ドミートリイが選び取った道とは、「明日の夜明け、《太陽がさし登るころ》」自らの命を絶つことであった。グレゴーリイを殺してしまったという、取り返しのつかない罪の意識。グルーシェニカを永遠に失ってしまったという、決定的な絶望感。これらがドミートリイを自己清算の決意に追い込んだのだ。借金のカタとして預けておいた拳銃を受け取った際、ドミートリイがペルホーチンに語る言葉に耳を傾けておこう。

> 「僕は人生を愛している。また余りにも愛してきた。浅ましいほどに、余りにも。もう十分だ！人生のために、君、人生のために飲もうじゃないか、人生に乾杯だ！なぜ僕は自分に満足しているのだろう？　僕は卑劣だ。だが自分に満足している。そう、だがやはり、自分が卑劣であることに苦しんでいるのに、自分に満足しているのだ。僕は神の創造を祝福する。今も喜んで神とその創造を祝福しよう。だが・・・今は悪臭漂う一匹の虫けらを絶滅させる必要がある。そいつが這いずり回って、他人の人生を台無しにしないように・・・さあ、大切な兄弟よ、人生のために飲もうじゃないか！　人生より貴い何があり得ようか？　あり得るものか、あり得るものか！人生に、そして女王中の女王に乾杯だ」(八５)

己の卑劣さへの痛烈な自覚と共に、なお彼の内深くに強く脈打ち続ける生命の鼓動。そこから表明される人生への、そして神とその創造への愛。――グレゴーリイ殺害とグルーシェニカ喪失の絶望と悲しみの只中、その血と涙にまみれた青年の内から迸り出てきたものとは、アリョーシャへの「告白」に見られたのと同じ、あのシラー的両極的な生命感の表白である。注目すべきは、作者ドストエフスキイがドミートリイを、「熱烈なる魂の告白」から、「裸の畑」との出会いの旅を経て、ここで殺人者としての自覚と自己清算の覚悟にまで追い込んだことである。「絶望」と「死の気配」が支配する「裸の畑」との直面から、今や「死」と「絶望」そのものに捕えられ、ドミートリイは「悪臭を放つ一匹の虫けら」たる自分の「絶滅」を覚悟するところにまで追い込まれたのだ。この「絶滅させる(イストレビーチ)」という激しい旧約的動詞については、次回第６章でスメルジャコフが残した遺書について扱う際に、改めて考えよう。

「明日の夜明け、《太陽がさし登るころ》」、自己を「絶滅させる」との決意。同時にドス

トエフスキイがこの青年の内から噴き出させるのは、死を前にして一層激しく燃え上がる生命愛である。この生命愛は、死ぬ前にグルーシェニカに一目でも会いたいという猛烈な願望となって、彼をモークロエ村へと駆り立ててゆく。

ドストエフスキイ的時間空間感覚

モークロエ村に向けて、ドミートリイを乗せたトロイカが「空間を貪り食いながら」疾走している。筆者によれば正にこの時とは、満天の星の下、アリョーシャが修道院の庭で大地にひれ伏し、「永遠にこの大地を愛すると狂ったように誓い続けていた」時であった。筆者のこの指摘から更に我々が導かれるのは、ドミートリイを始めとして主人公たちが置かれた「カラマーゾフ的パノラマ」とも言うべき、時空を包み込んだ広大な展望である。

―― アリョーシャの回心体験が展開する修道院。ここではゾシマ長老が棺に納められ、腐臭を放つその棺の傍らでは、パイーシイ神父による福音書朗読が続いている。修道院の時空は、遥か遠く新約の世界と連なっている。転じて家畜追込町のカラマーゾフ家。主の寝室では頭を打ち砕かれたフョードルの死体が横たわり、庭の石塀の傍らでは、血まみれの下男グレゴーリイが横たえられている。惨事を知り隣家に駆けつけたマルファから依頼され、間もなくマリア・コンラードチエヴナが警察署長の家を目指し、夜の町を駆け抜けるであろう。(スメルジャコフの死の場合と同じくマリアとは、恐るべき知らせをもたらすべく家畜追込町の夜の闇を駆け抜ける悲しい「天使」である)。一方庭の下男小屋のベッドでは、スメルジャコフが恐怖と不安の虜となって震えている。フョードル殺害のために仕組んだ偽りの癲癇発作は、凶行後のパニックにより、やがて激烈な真正の発作へと移行してゆくであろう。「悪業への懲罰」が始まったのだ。遥か遠く、モスクワを目指す汽車の中。ここでは「前衛的肉弾」スメルジャコフに全てを放り投げ、家畜追込町から逃げ去ったイワンが「生涯で初めて味わう」痛烈な憂愁(タスカ)に捕えられ、自らの「卑劣さ」と向き合っている。これもまた「悪業への懲罰」の現前である。一方、ドミートリイが目指すモークロエ村。ここには五年間の悲しみと苦悩と夢の一切が無であったことを悟ったグルーシェニカの呆然たる姿が見出されるであろう。かつて自分を棄て去った「若鷹」が、今や「鴨」となり果てたことを知ったグルーシェニカ。だが間もなく彼女は、一切を失った絶望の底から、アリョーシャと同じく決定的な回心体験を与えられるであろう（グルーシェニカの宗教体験については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』ⅦＤ５を参照）・・・

生と死、聖と俗、永遠と瞬間、希望と絶望、飛翔と墜落、罪と罰、天国と地獄、神と悪魔、光と闇。これら相容れぬ絶対の両極が交錯し合い、それぞれのドラマを一時(いちどき)に展開させつつある満天の星の下。ここにあるのは「神と不死」を巡り「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる曼陀羅の図絵(ドラマ)であり、正にドストエフスキイ的カーニバル空間に他ならない。筆者はモークロエ村に向かって疾走するトロイカを「空間を貪り食いながら」と表現する。空間のみではない。我々はこの一晩、この一時に、ドストエフスキイ的空間時間感覚の一切が煮詰められ、人間理解と世界理解と歴史理解とが極限化され、『カラマーゾフの兄弟』

の原構図として提示されていることに気づかされるのである。

このカラマーゾフ的パノラマの中、モークロエ村に向かい疾走するトロイカの車中、ドミートリイの耳に響いてくるのは御者アンドレイの純朴この上ないイエス・キリスト観である。我々はここに、ドミートリイを描く作者ドストエフスキイが踏み出した新たな一歩を見出すと考えるべきであろう。シラー的ロマンチズムの世界を生きるドミートリイから、福音書的世界を生きるドミートリイへ。即ちカラマーゾフの世界とは、家畜追込町から時空を遠く遥かに超えて福音書的世界と重ねられ、主人公たちの生と死のドラマが展開する場であること、そしてドミートリイもまたその両世界を生きる人物であることが明らかとなるのである。ドストエフスキイ世界を構成する、聖と俗の二重構造（ベルテップ）である。

トロイカの車中で

「悪臭を放つ一匹の虫けら」。この痛切な自覚から、自らの命を「絶滅させる」ことを決意したドミートリイ。彼は疾走するトロイカ上で御者アンドレイに問う。「この俺は地獄に落ちるだろうか？」。旦那を慰めるべく御者が返すのは、恐らくはロシア民衆の間で長く語り継がれてきた説話であろう。罪人たちに注がれるイエス・キリストの十字架愛について、そして罪人たちが永遠にひしめき合う地獄について、馬たちを疾走させながら、アンドレイは叫ぶ。

> 「旦那、神の子が十字架につけられてお亡くなりになった時、神の子は十字架から真っ直ぐに地獄へとお行きになり、苦しんでいる罪人たち全員を解き放っておやりになったんです。すると地獄はもう自分のところには誰ひとり罪人たちがやって来ないだろうと考え、このことで呻き始めたんです。すると主［神の子キリスト］は地獄に向かってこう仰ったんです。《呻くな、地獄よ。なぜならばお前のところには今後もあらゆるお偉方、支配者、裁判官、金持ちたちがやって来て、次に私が訪れるまでには、正に今に至るまで永代そうであったように、一杯になっているであろう》。これはその通りで、これはその通りのお言葉なんで・・・」（八６）

ここでも思い起こされるのは、イワンが語る「聖母の責苦（地獄）めぐり」だ。「大審問官」の叙事詩をアリョーシャに語り聞かせるにあたり、イワンはまず地獄に沈んだ罪人たちに向けられた聖母マリアの愛と、それを受けた神の愛の至上絶対性を描いた物語を紹介する（五５）。ギリシアの古詩に発し、ロシア民衆の間で愛されてきたとされる物語であり、ここにあるのはキリスト教の精髄とも言うべき至上の聖なる愛への讃歌である。トロイカ上で御者アンドレイが語るのもまた、地獄で苦しむ罪人たちに向けられる「キリストの愛」であり、ここにはロシア民衆の心に生きるキリストへの信と愛が、民衆的ユーモアをも含めて見事に表出されている。「父親殺し」を巡り、スメルジャコフによって「地獄」に突き落とされたイワンとドミートリイ。これら「ロシアの小僧っ子」が見失った、そして彼ら

がやがて至るべきロシア的信と愛を、作者は御者アンドレイを介して、一瞬瞥見させたと考えられるのである。

スメルジャコフの影

我々がここで改めて確認すべきは、「この俺は地獄に落ちるだろうか？」、この問いと共にモークロエに向けてトロイカを疾走させるドミートリイにも、そして己の「卑劣さ」の自覚を抱えてモスクワに逃げ帰るイワンにも共に、スメルジャコフの暗い影が大きく差していることだ。既に繰り返し見てきたように、運命の理不尽さと醜悪さを憎悪するスメルジャコフの怒りと呪いは、フョードルばかりかイワンやドミートリイという異母兄弟にも、そしてロシア民衆や祖国ロシアにも、更には千九百年近くの時間を隔てて、イエスと神にまでも向けられているのだった。その復讐劇はいよいよフョードル殺害となって現実化し、その衝撃はイワンを、またドミートリイをも巻き込み、彼らをそれぞれの「地獄」に突き落としたのである。そして忘れてならないことは、カラマーゾフ的パノラマの世界においては、他ならぬスメルジャコフその人もまたフョードル殺害を果たすや否やパニックに襲われ、懼るべき「悪業への懲罰」の現前が開始されているという事実である。

ドストエフスキイは果たしてこれら「ロシアの小僧っ子」たちをそれぞれの「地獄」に突き落とし、そのまま永遠の奈落を運命づけて物語に終止符を打つのか、あるいはその先「光」の中に歩み入らせるのか。既に見てきたようにイワンの場合、この兄を傍らから見守り続けたアリョーシャは、自らの罪の重荷に耐えられず人格を崩壊させつつある兄が、やがて「真実の光の中に起ち上がる」こと、そして「十字架への道」を歩み始めること、結局は「神様が勝つ」との確信をその祈りの中で表明したのであった（第３章6）。自らの命を「絶滅させて」しまった異母兄弟のスメルジャコフを、アリョーシャが如何に捉えたかについては、改めて次回に検討するテーマである。

ドミートリイの場合はどうか。彼が自らを「絶滅させる」ことを覚悟して乗り込んだモークロエ村。ここで彼に死を超えた新たな「十字架への道」を指し示すのは、御者アンドレイに続いてグルーシェニカであり、更には父親殺しとして誤認逮捕される彼自身の運命に他ならない。ドストエフスキイがこの青年に用意するのは新たな「裸の畑」、「裸形の曠野」における「黒い不幸」との出会いだ。そしてその先、彼がなお進むべき遥か彼方の「十字架への道」を指し示すのは、やはりアリョーシャである。これは既に前回の最後に扱ったが（第４章6）、我々は今回もこの後（5）改めて確認しよう。

4. モークロエ村で　—「餓鬼」、「罪なき幼な子」との出会い—

ドミートリイの「名誉と誇り」

モークロエ村。下男のグレゴーリイを殺してしまったと思い込み、死を覚悟した上で、

グルーシェニカに一目会おうと乗り込んだモークロエにおいて、この青年は何と出会い、新たに何処に向かうのか。

まず先にグルーシェニカのドラマを確認しておこう。駆けつけたモークロエ村で彼女が見出したのは、「若鷹」から哀れな「鴨」に変わり果てた昔の恋人であった。五年間の苦しみと希望の一切が無であったことを知った彼女は、ここで初めてドミートリイこそが真の「鷹」であったこと、自分が愛を捧げるべき存在であることを悟る（八７）。続いて起こるのは、彼女の決定的な回心体験である（八８）。これは家畜追込町での「一本の葱」体験（七３）に続く、また修道院でのアリョーシャの回心体験（七４）と同時呼応する、絶対的赦しの神との出会いである。グルーシェニカのこの神体験について、また新たに甦った彼女について、ここで扱う余裕はないが（拙著『カラマーゾフの兄弟』ⅦＤ５を参照）、その後の彼女がカチェリーナへの嫉妬に苦しみつつも、ドミートリイの魂に一貫して寄り添う愛の存在に変貌することは指摘しておこう。

グルーシェニカの甦りとは対照的に、ドミートリイは窮地へ窮地へと追い込まれてゆく。家畜追込町では既に、フョードル殺害を知った警察による捜査が始まっていた。ドミートリイは当局の先遣隊によって監視され、間もなくモークロエに到着した本隊によって身柄を拘束される。予審が始まり、捜査当局からグレゴーリイが生きていることを知らされた瞬間、ドミートリイもまた「甦った」かに思われた。ところがスメルジャコフが仕組んだ巧妙なフョードル殺害計画により、彼が犯人であるとの状況証拠が次々と積み上げられてゆく。

だが「父親殺し」から解放されたドミートリイにとって、今や残された懸念はただ一つしかなかった。カチェリーナから預かった三千ルーブリについての「名誉と誇り」の問題である。既に見たように、先のモークロエでの豪遊で、彼はこの金の全額を使い果たしてはいなかった。残りの千五百ルーブリはボロ布で作った小袋に入れ、首から吊るしていたのである。既にこの金はモークロエ村に乗り込む資金として取り出され、布の子袋も何処かに投げ捨てられてしまっていた。しかしドミートリイにとっては、このボロ袋が存在していたという事実こそ自分の「高潔さ」を証し、自分が「卑劣漢」ではあっても決して「泥棒」ではないことを示す決定的な証拠だったのだ。だがこの青年の胸に隠されていたという小さなボロ袋の話など、またその内で密かに保たれていたシラー的ロマンチズムの「名誉と誇り」など、検事や予審判事たちにとっては旦那の寝言でしかなかったのである。残った金を探し出すべく、裸同然での身体検査がなされ、ドミートリイの「名誉と誇り」はズタズタに打ち砕かれてゆく。予審の経緯の詳細を追うことは、ここまでとしよう。

雨に打たれるモークロエ

時は既に朝の八時となっていた。ドミートリイは検事や予審判事が突いてくる様々な問いに、結局何一つとして明快な答えを返すことが出来ないまま、夜が明けたのである。予審は証人尋問を残すだけとなり、誰もがこの上なく疲れ切っていた。「考える力を失くした

ような」「絶望的な表情」で、「放心したように」座り込んでいたドミートリイは、起ち上がって窓の外に目をやる許可を求める。

昨夜の輝く星空が一転し、いつの間にか空からは激しい雨が降り注いでいた。窓外を見つめる彼の目に映し出されたのは、雨に煙る彼方に黒々としたみすぼらしい姿を曝すモークロエ村の農家の列であった。それらは雨のため一層黒々とし、その貧しさも更に一層増して見えていた。前々日から前日にかけての「猟犬」ゴルストキンを探す旅。その最後に行き当たった「裸の畑」、そしてそこを支配していた「絶望」と「死の気配」。これらに続いて今目の前に広がるのは、土砂降りの雨の中に黒々と煙るモークロエの村である。ドミートリイは思い出す。つい昨夜自分が決めた自殺の時とは、「永遠の青年アポロが神を讃美し祝福しつつ舞い上がる時」、輝かしい日の出の時であったはずだ。ところが今、自分の目の前に広がる光景とは、ただ激しく降り注ぐ雨であり、その雨に遠く黒く煙る貧しい農家の列でしかない。これこそ「絶望」と「死の気配」が支配する時であり、正に自分の「絶滅」に相応しい時であろう・・・

先にも見たように、ドミートリイの心の底には、長年にわたってこのような黒々とした荒涼たる寒村の光景や「裸の畑」の光景が、そして「絶望」と「死の気配」と「自己絶滅」への思いが、その天翔ける魂の飛翔と旦那的放蕩生活の底に、幾重にも幾重にも沈み込んでいったのであろう。それは「虫けら」たる自己の「卑劣さ」と、その「悪臭と汚辱」についての痛切な自覚を超えて、更に心の奥深くに沈殿した「裸形の曠野」であり、やがて来るであろう彼との対決の時を待っていたのだ。モークロエにおける予審の場とは、一切が無となったグルーシェニカの稀に見る鮮やかな回心体験と呼応して、ドミートリイが己の内深くに沈み込んだ「裸形の曠野」と正面から対決させられるべく召喚される場、つまりはもう一つの裁きの場でもあったのだ。

「餓鬼（ジチョー）」の夢

証人尋問が終わる。疲れ果て、調書の整理を待つ間、部屋の片隅で束の間の間眠（まどろみ）に沈んだドミートリイに「奇妙な夢」が訪れる。

> 「どこかの曠野を、以前の勤務地か、百姓が二頭立ての馬車でドミートリイを運んでゆく。十一月初めの寒さの中、大粒のべた雪が地面に落ちては直ちに溶けてゆく。とある部落にさしかかるや、黒々とした百姓家が見え始める。それら百姓家の半数は火事で焼かれ、黒焦げになった柱のみが突っ立っている。部落の出入口の道端には多数の農婦たちがずらりと一列に並んでいる。誰もが痩せこけて憔悴し切り、彼女たちの顔は褐色じみている。中でも一番端にいる農婦は四十歳位に見えるが、ことによるとせいぜい二十歳位かもしれない。彼女の顔は長く骨張っていて、腕に抱かれた赤ん坊が泣き喚いている。恐らく彼女の胸は萎び切っていて、一滴の乳も出ないのであろう。赤ん坊は泣きに泣き、寒さのためすっかり紫

がかってしまった剥き出しの手を、小さな拳に固めて差し伸べている」（九８）

大粒のべた雪が降りしきる曠野。黒々とした百姓家。焼け出された農家。黒焦げの柱の列。痩せ衰えた農婦たち。そして母親の手に抱かれて泣き叫ぶ「餓鬼」。そこに「光と喜び」はなく、人々が「抱き合う」ことも「接吻」することも不可能な、ただ「凍てつく」世界が黒々と広がっている。

先ほど見た雨に煙るモークロエ村の黒々とした農家の列。前々日から前日にかけての「猟犬」ゴルストキンを求めての金策の旅。その最後に行き当たった「裸の畑」。そしてそこを支配していた「絶望」と「死の気配」。

―― 夢の世界と現実世界。これら二つの世界が「黒々とした」イメージで結ばれ、今やそれらの間に境界はない。そこに響くのは「餓鬼」の泣き叫ぶ声のみ。夢の中で馬車を駆る御者と、モークロエ村へとトロイカを疾走させた御者アンドレイ、恐らく今やこれら両者の区別もつかぬままに、ドミートリイは立て続けに問い続ける。

「何を泣いているのだ？ なぜ泣いているのだ？」
「餓鬼（ジチョー）です。餓鬼が泣いているんです」
「だが、どんなわけで泣いているのだ？どうして手を剥き出しにしているのだ、どうしてあの子をくるんでやらないのだ？」
「餓鬼は凍えちまったんです。着物（おべべ）が凍り、温（ぬく）くならねえんです」
「だが、どうしてそうなのだ？　どうしてなのだ？」
「貧乏なんです。焼け出されたんです。一片のパンもないんです。焼き出された場で物乞いをしているんです」
「そうじゃない、そうじゃない。教えてくれ。どうして焼け出された母親たちはあのように突っ立っているのだ。どうして人々は貧乏なのだ。どうして餓鬼たちは哀れなのだ。どうして曠野は裸［裸形の曠野（ゴーラヤ・ステッピ）］なのだ。どうして彼女たちは抱き合わないのだ。接吻を交わさないのだ。どうして彼女たちは喜びの歌を歌わないのだ。どうして彼女たちは黒い不幸のためにあんなに黒くなってしまったのだ。どうして餓鬼に乳をやらないのだ？」（九８）

「どうして餓鬼たちは哀れなのだ。どうして曠野は裸なのだ」。「どうして彼女たちは黒い不幸のためにあんなに黒くなってしまったのだ」。幼な子が発するような素朴この上ない、しかも執拗とも言うべき矢継ぎ早の問い。だがこれ以上に根源的な問いを人間が問い得るであろうか。筆者はドミートリイ自身「たとえ自分は気違いじみた意味のない問いを発しているとしても、自分はどうしても正にこのような問いの発し方をしなければならない、どうしても正にこのように問いたいのだと感じていた」と記す。

ただ泣き叫ぶ「餓鬼」と、「接吻」も「喜びの歌」も奪われた「黒い不幸」――行き着い

た「裸形の曠野」でドミートリイが出会ったのは「黒い不幸」だったのだ。

「感動」、ドミートリイの覚醒体験

続けて筆者が報告するのは、ドミートリイの内で起こりつつあった更なる変化についてである。夢の中で泣き叫ぶ「餓鬼」を前にして、御者に「何故だ？」「どうしてだ？」との問いを矢継ぎ早に発し続けたドミートリイに、「何か未だかつてなかったような感動が心の内に湧き起こり、彼は泣きたくなるのを感じていた」とされるのだ。

> 「もうこれ以上餓鬼が泣かないようにするのだ。その餓鬼の、黒く痩せこけた母親も泣かないようにするのだ。この瞬間から誰の目にも一切涙など浮かぶことがないようにするのだ。一刻の猶予もなく、是が非でも、抑えることの出来ないあらゆるカラマーゾフ的な力を以って今こそ、今こそそれをするのだ」（九８）

ドミートリイの内から湧き起こった「何か未だかつてなかったような感動」。世界と自らの根底に存在する「黒い不幸」との出会いがもたらす「感動（ウミリェーニエ）」を構成するのは、何重もの「涙」である。――「餓鬼」の涙と、その黒く痩せこけた母親の涙。そしてこれら母と子の涙に触れたドミートリイの内から湧き起こる涙。それは悲しみの涙であると同時に、悲しみを超えて「喜びの歌」を求めて噴出する涙でもある。

「黒い不幸」の現前。それは悲しみと喜びという一見相反する両極感情を、一時（いちどき）に彼の内から噴き出させる「感動」体験だったのだ。だがドミートリイが触れたこれら二つの涙・両極感情は決して相容れないものではなく、一つの根から噴き出たもの考えるべきであろう。それは人間の魂の最深奥において発動する根源的な宗教的感情であり、筆者もそれを「感動」と表現する他ないものなのだ。そしてこの涙、根源的な宗教的感情の向こうに我々が聴き取るのは、ヨハネ黙示録の終局に記されたバビロンの滅亡と、「新しきエルサレム」の到来にあたって響くあの「大いなる声」である。

> 「視（み）よ、神（かみ）の幕屋（まくや）、人（ひと）と偕（とも）にあり、神（かみ）、人（ひと）と偕（とも）に住（す）み、人（ひと）、神（かみ）の民（たみ）となり、神（かみ）みづから、人（ひと）と偕（とも）に在（いま）して、かれの目（め）の涙（なみだ）をことごとく拭（ぬぐ）い去（さ）り給（たま）はん。今（いま）よりのち死（し）もなく、悲嘆（かなしみ）も、号泣（さけび）も、苦痛（くるしみ）もなかるべし。前（さき）のもの既（すで）に過（す）ぎ去（さ）りたればなり」
>
> （ヨハネ黙示録二十 3-４）

「神みづから、人と偕に在して、かれの目の涙をことごとく拭い去り給はん」。ドミートリイを「黒い不幸」の内に追いやったドストエフスキイは、この青年を黙示録的終末感覚の中にあって、そこから神の絶対的救済感覚に触れる直観能力に恵まれた、天性の宗教的人間であり詩人として提示したと考えられる。思い起こすべきはイワンである。ドストエフスキイはこの青年をもまた究極の神の支配、絶対調和の時が訪れることを夢見る青年と

して描いているのだ。つまり地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちを凝視するこの青年は、「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」の中で、いつの日か人間と世界と歴史の一切が終末を迎え、神が言われなき受難者たちの「目の涙をことごとく拭い去り給はん」時の到来することを夢想する「ロシアの小僧っ子」なのだ（五４）。―― ドミートリイとイワン。「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」としてのカラマーゾフの兄弟たち。「餓鬼」の涙と「罪なき幼な子」の涙から、ヨハネ黙示録を介して、 この作品の原構図がクッキリと浮かび上がる。

しかし忘れてならないことは、ドストエフスキイが描くカラマーゾフの兄弟たちとは、未だ成長途上にある未完成体の「ロシアの小僧っ子」であるということだ。イワンは父親殺しの罪意識に苛まれ、繰り返しスメルジャコフの許を訪れつつも、なおその罪の最終的な自覚に至れぬまま人格崩壊の途を辿るであろう。つまり彼は懼るべき「悪業への懲罰」に曝される運命にあるのだ（十一５-１０、第３・４章)。ドミートリイにおいても、この青年に与えられた見事な宗教的直観と「感動」が、改めて彼の意識の上で言葉となり認識となり、具体的な行動として表現されるまでに、ドストエフスキイが彼に歩ませる道はなお長く険しい。この道程を描くドストエフスキイの筆を、我々はなお暫く追わねばならない。

「新しい呼び招く光」

ドミートリイが与えられた「感動」。これを読者の心により確かに刻もうとするかのように、またドミートリイ自身の更なる覚醒を促そうとするかのように、筆者はこの時ドミートリイのすぐ耳元で、「優しい、心にしみ通る」グルーシェニカの声が響くのが聞こえたと記す。「私もあなたと一緒よ。私これからあなたを見棄てるなんてことはしない。一生あなたと一緒に行くのよ」。グルーシェニカのこの囁きを、単なる甘い恋心の表出などと取ってはならないであろう。同じくつい先に、神の絶対の赦しという宗教体験を与えられたグルーシェニカの魂が、ドミートリイの「感動」と相呼応し響き合ったと考えるべきであろう。ここにあるのは、作者の深い構成意図である。事実筆者は「その瞬間、ドミートリイの心の全てが燃え上がり、何かの光を目指して突き進んで行った」と記し、更に彼を捉えた「光」に向かう「生」への意志について、こうも記すのである。

> 「生きたい、本当に生きたい。新しい呼び招く光に向かって、何らかの道を歩いて、歩いてゆくのだ。それも一刻も早く、一刻も早く、今こそ、今！」（九８）

「新しい呼び招く光」。筆者はドミートリイの「感動」の根が、彼を呼び招くこの「光」であったことを確証しようとするかのように、更に一つ、印象的なエピソードを付け加える。「明るく微笑んで」目覚めたドミートリイは、いつの間にか誰かが自分の頭の下に枕を当ててくれていたことに気づいたとされるのである。この「善良な人」とはグルーシェニカなのか、あるいは他の誰なのか、筆者は具体的に記さない。

悲惨な「餓鬼の夢」。「喜びの歌」を求めての涙と「感動」。「新しい呼び招く光」。優しく心に沁み通るグルーシェニカの声。そして密かに枕を当ててくれた「善良な人」。―― 自殺を心に期していた朝、「黒い不幸」と共に突如殺到してきたこれら「光」を巡るドラマの一切を体験したドミートリイは、「魂を涙で打ち震わせ」、自らの「夢」について取調官たちにこう報告したと記される。

「僕は素晴らしい夢を見たのです、皆さん」（九８）

筆者はこの時ドミートリイが、「何か新しい喜びに輝くような顔で、何か奇妙な声を発した」とだけ記す。ドミートリイは自分が見た「夢」と、そこから与えられた「感動」について、また「新しい呼び招く光」について、木石の心しか持たぬ取調官たちに説明することを嫌ったのであろう。だがその理由はむしろ、彼自身未だこの体験とその「喜び」を言葉で明確に表現する用意がなかったからであろう。

轟いた「雷」

予審が終了し、ドミートリイに家畜追込町への護送が告げられる。公判まで未決犯として拘置されるためである。彼は部屋の全員に向かって語りかける。筆者は念を押すかのように、これが「何か押さえ難い感情」と共に語られたものであると記す。

「皆さん、我々は誰もが冷酷な人間です。我々はみんな屑です。みんなが他の人間や母親や乳呑子たちを泣かせているのです。しかし中でも―― 今となってはそのように決めつけて下さって結構です ―― 中でも僕が最も卑劣な悪党なのです！そうお決めつけになって下さい！僕はこれまでの人生で毎日、この胸を叩いてまともな人間になることを誓いながら、毎日相も変らぬ忌まわしいことばかりをし続けて来たのです。今こそ分かりました。僕のような奴には一撃が、運命の一撃が必要なのです。そいつを動物の首に縄をかけるように捕まえ、外からの力で縛り上げるためです。決して、決して僕は自分自身では立ちあがることは出来なかったでしょう！しかし雷が轟いたのです。僕は告発と、僕の恥辱が公に曝される苦しみを甘んじて受けます。苦しみたいのです。苦しみによって浄められたいのです！と言うのも、あり得ることでしょう、本当に浄められるということが、皆さん、え？」（九９）

人間は誰もが「冷酷」であり「屑」である。「みんなが他の人間や母親や乳呑子たちを泣かせている」。中でも自分こそが「最も卑劣な悪党」なのだ。―― 先の「感動」体験、「餓鬼の夢」を通して臨んだ「新しい呼び招く光」についての思索が早くも開始され、新たに自らの根源的罪性の自覚と、その贖罪への決意として表明されるに至ったのだ。本論で扱

う余裕はないが、アリョーシャの回心体験もグルーシェニカのそれも共に、己の罪性についての深い自覚と、そこからの絶対的「赦し」への希求とによって構成された体験である（拙著『カラマーゾフの兄弟論』ⅦＡ1・2・3,Ｄ５・６を参照)。そしてドミートリイの覚醒体験の言語化もまた、「冷酷な人間」「屑」「卑劣な悪党」という言葉で言い表され、未だ明瞭に「罪」という言葉で表現されてはいないにせよ、アリョーシャやグルーシェニカと全く同じ方向で開始されたことに注意しておこう。

この覚醒と共に、「苦しみ」による魂の浄化・新生を誓い、ドミートリイはモークロエ村から家畜追込町の監獄へと送り返されてゆく。この町からモスクワに帰還した、つまりはスメルジャコフから逃げ去ったイワンが車中で、生涯で初めて味わう痛切な「憂愁」と共に、自らの「卑劣さ」と直面したのと同じ朝のことだ。

5.カラマーゾフ世界の宗教的覚醒体験　―イエス像に向かって―

カラマーゾフ世界の宗教体験

ドミートリイのドラマが独自な宗教体験を孕み、しかも彼の宗教的認識の深化と覚醒のドラマであるという相貌をはっきりと顕し始めた。4に続くドミートリイのドラマ自体は、次の6で扱うことにして、ここではしばらくカラマーゾフ世界の宗教体験、あるいは宗教的覚醒体験という問題の前に立ち止まり、この作品が持つ宗教性について、そしてそれが具体的にどのようなテーマを核として展開しているかについて考えておこう。但し系統的な考察というよりは、アト・ランダムに選んだ三つの問題についてのデッサン、あるいは今までの考察の整理メモのようなものとして記しておきたい。

（1）「ロシアの小僧っ子」たちの宗教的覚醒体験

今まで見てきたように『カラマーゾフの兄弟』には、ドストエフスキイが刻む主人公たち、「ロシアの小僧っ子」たちの宗教的覚醒体験が満ちている。ドミートリイの「素晴らしい夢」という言葉で表現された「餓鬼の夢」の「感動」体験、「新しい呼び招く光」の体験もまた、先に記したように修道院でのアリョーシャの一連の回心体験や、モークロエにおけるグルーシェニカのそれと同時呼応した、宗教的覚醒体験と言うべきものである。そして彼らの体験は全てが極めて個性的（ユニーク）なもの、「ロシアの小僧っ子」としての独自の意味と深みに満ちたものである。今まで取り上げたイワンやスメルジャコフの神への反逆や運命への復讐劇もまた、父親殺しという血の一線を踏み越えた後に、彼らに臨む懼るべき「悪業への懲罰」と、その末の神との出会いのドラマは、それぞれが唯一無二の決定的宗教体験と呼ぶべきもので、我々はそれらを個々別々に捉えるのではなく、先に見た「ドストエフスキイ的パノラマ」の内で、互いが深く呼応し合うドラマ性を持った超越体験として捉える必要があるだろう。この問題は次回スメルジャコフと神の問題を中心に、また改めて

考えよう。

W.ジェイムズの『宗教的体験の諸相』（１９０２）や、R.オットーの『聖なるもの』（１９１７）。これらは共に人間の魂が与えられる宗教的超越体験を扱った二十世紀初頭の名著であるが、もしこれら二著がドミートリイの宗教的覚醒体験を始めとする様々なカラマーゾフ世界の宗教体験を取り上げ、それらの具体的経緯やドラマ性、そして意味や特性や歴史的背景等について考察を加えていたとするならば、既にそれらが持つ深みと豊かさは更に一層増し加わっていたであろう。

聖性への感覚を失い、ますます世俗化と精神の怠惰さの度合いを進める現代、ドストエフスキイへのアプローチもまた、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」への関心は失われ、非聖化の波はその勢いを止めることはない。十九世紀末に産み出されたカラマーゾフ的宗教体験を改めて正面から受け止めることは、時代錯誤の試みであるどころか、二十一世紀を背負う若者たちのために、我々に託された大きな課題である。

本章においても、ドミートリイの三千ルーブリを求めての彷徨とは、結局は「裸の畑」に至る旅であること、またこの旅とは彼の内なる「裸形の曠野」とそこでの「餓鬼の夢」に行き着く旅であるという、より大きな宗教的認識の深化と覚醒史の枠組みの内に位置づけられることが浮かび上がってきた。更にこの認識は泣き叫ぶ「餓鬼」、「罪なくして涙する幼な子」を前に、「父親殺し」の罪で誤認逮捕された自分こそが、世に満ちる「黒い不幸」に対して罪ある人間に他ならないとの自覚にまで煮詰まり、最終的にドミートリイはアリョーシャを前にして、イエスの十字架を担って生き得るか否かという永遠の問題の前に引き出されることになるのだ。作者ドストエフスキイがドミートリイを福音書的磁場の内に置き、そのドラマを構成していることを見失ってはならない。

（２）「罪なくして涙する幼な子」と「父親殺し」、作品の二つの核

我々は先に「カラマーゾフ的世界のパノラマ」という言葉で、登場人物たちのドラマが個々離れ離れにではなく、互いに密接に関係し合い響き合って進行していることを見た(3)。カラマーゾフ的宗教体験もまた相互に関係し合い響き合う体験であり、その際に二つの核を持つドラマとして展開することも、ここで改めて確認しておこう。

ドミートリイとイワンとスメルジャコフ、そしてアリョーシャ。『カラマーゾフの兄弟』の膨大で迷宮のような世界に分け入れば分け入るほど、我々が気づかされ驚かされることは、作者ドストエフスキイが「父親殺し」と「罪なくして涙する幼な子」という二つの核となるテーマを巡って、これら四人の兄弟たちのドラマを実に周到に各人それぞれの生に即して刻み、また実に複雑にそれらを互いに交錯させて構成しているということだ。

これら兄弟四人の生を刻印する第一の特徴とは、皆幼くして母を失い、父フョードルから「忘れられ、棄て去られる」という悲劇的運命を背負わされた子供たちであるという事実であろう。この地上世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」の存在とは、イワンが厳しく見つめる地上世界の現実であるが、これは広く世界に目を向ける前に何よりもまず、

四人の兄弟たち一人ひとりがその身に負わされた運命なのだ。そしてこの作品においてはもう一つの大きな核である「父親殺し」の問題も、また人間の罪と罰と赦しの問題もまた、この「罪なくして涙する幼な子」たちの問題と深く絡み合いつつ展開してゆくのである。これらのことを、以下で四人の兄弟たちに即して「覚え書き」的に記しておこう。

イワン　「罪なくして涙する幼な子」たちの受難。この事実を前に、神とその世界を厳しく弾劾した末に、遂には神をもイエス・キリストをも斥け、自らを「一切が許されている」神とし、故郷で「父親殺し」を謀るのがイワンである（第２・３章）。ところがこのイワンその人が、自らの目の前にいる異母兄弟かつ下男のスメルジャコフに強い関心を抱きながらも、世に満ちる「罪なくして涙する幼な子」の一人に他ならないことに気づかないのだ。イワンの「父親殺し」とは、彼のこの致命的とも言うべき抽象性と旦那的倨傲の矛盾・欺瞞を孕んで進行する罪と罰と赦しのドラマであると言えるだろう。

スメルジャコフ　「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフ。この存在の悲劇性と悪魔性とは、自らが放り込まれた理不尽で醜悪な運命ゆえに、地上と天上一切を憎み呪い、その憎悪と呪いをひたすら復讐に、具体的には「父親殺し」に振り向けてゆくことだ。帰郷したイワンの人神思想に感動した彼は、この異母兄弟の「前衛的肉弾」として遂に父親フョードルを殺害するに至る（第１・２・３章）。その過程で明らかとなるのは、彼が異母兄弟であるイワンにもドミートリイにも結局は心を開かず、彼らを「父親殺し」という運命の復讐劇に巻き込み、更にはもう一人の「罪なくして涙する幼な子」イリューシン少年をも巻き込み、遂には自らを「絶滅」に追い込んでしまうという悪魔性と悲劇性である。

このスメルジャコフが抱える矛盾と欺瞞、真の悪魔性と悲劇性とは、理不尽で残酷な運命への余りにも強い憎悪と呪いのために、自分の身近にいる「親切な人々」、つまり育ての親グレゴーリイ夫婦や婚約者マリアや異母兄弟アリョーシャたちが自分に注ぐ愛と善意を無視し、ひたすら運命への復讐に向かってしまったことである。この「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフに「実行的な愛」の人アリョーシャが注ぐ目と愛と、「父親殺し」を巡って二人の間に展開するドラマ、そしてスメルジャコフの神との関係、つまりはその罪と罰と赦しの問題、―― 本論の核となるこれらの問題については、次回最終回に改めて扱わねばならない。

ドミートリイ　そしてドミートリイである。この長兄が自らの内なる「カラマーゾフの力」に駆られ、様々な悲喜劇を通して自らの最深奥に潜む「裸形の曠野」とその「黒い不幸」に行き着き、独自の「感動」体験を与えられたことは今まで見てきた通りである。そしてこの体験の核となり、彼の新たな出発点となるのは「餓鬼の夢」だ。イワンと同様彼もまた、彼の道を通って「餓鬼」という「罪なくして涙する幼な子」の存在に行き当たったのである。ドミートリイが「新しい呼び招く光」に導かれ、この「餓鬼」との出会いから与えら

れた「感動」を、「冷酷な人間」「屑」「卑劣な悪漢」としての痛切な自覚に進め、更にその後十字架を前にした己の罪性と赦しの問題として如何に深めてゆくか、そしてそこにはなお如何なる光と闇の問題が存在するかについては、次の5で検討し、本章を終えることにしよう。

アリョーシャ　一方これら三人とは対照的に、父親をも誰をも裁き去ることなく受け容れ、「父親殺し」を巡って兄たちがそれぞれに落ち込んだ不幸と「重い病」を冷静に見据え、彼らが光の中に立ち上がるべく寄り添い続けるのがアリョーシャである。我々はこの青年を、決して中性的で生彩のない存在とは考えない。前回我々はアリョーシャとは、スメルジャコフやイリューシンばかりでなく、人間全てを等しく「同じ」存在とし、「罪なくして涙する幼な子」として捉える透徹した認識と愛の人であることを見た。そしてこの青年はイエスと師ゾシマに倣い、あらゆる「幼な子」たちの生と死に静かに寄り添い生きる「実行的な愛」と信の人であることを確認し、彼の特性とはその精神の透徹と強靭さにあると結論づけたのであった（第４章)。アリョーシャについては、この後の5において、新たに「甦った」ドミートリイがなお内に宿す「光と闇」の現実を冷静かつ正確に見抜き、決定的な宣告を下す姿を改めて確認しよう。

（３）福音書的磁場を生きる兄弟たち、その成長史

かくしてカラマーゾフ世界のドラマとは、以上見たように、肯定的な方向であれ否定的な方向であれ、「罪なくして涙する幼な子」を巡って、そしてまた「父親殺し」を巡って、四人の兄弟たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマとして見ることが可能であろう。忘れてならないことは、これら四人の兄弟たちのドラマを扱うドストエフスキイの視点が、直接は家畜追込町の具体的現実に向けられたものでありながら、単に家畜追込町の一家庭内で繰り広げられる激しい愛憎の葛藤劇に限定されることがないということである。つまりカラマーゾフ家四人の兄弟のドラマは、家畜追込町におけるドラマからロシア社会が抱える問題性を帯びたドラマへ、更には福音書的磁場で人間存在そのものを象徴する普遍的ドラマの次元にまで高められるのだ。

決定的なことはドストエフスキイが、「罪なくして涙する幼な子」たる四人の兄弟たちを、ただ失われた瞼の母と父とを地上の何処かに探し求めるセンチメンタルな旅人として描くのではなく、永遠なる魂の母と父とを求める宗教的形而上学的な探求者・求道者として、つまりは「神と不死」求める「ロシアの小僧っ子」として造型し、その上で彼らを「父親殺し」という懼るべき試練の中に投げ込むことだ。

第一回目から見てきたように、その試練の過程（ドラマ）でドストエフスキイが彼らに出会わせるのがイエス・キリストの存在である。これら四人の兄弟は、不条理かつ醜悪この上ない荒涼索莫たる世界において、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上で磔殺されるまで貫いて生きたイエス・キリストという存在に、それぞれが何らか

の形で目を釘付けとされ、肯定の方向であれ否定の方向であれ、そのイエスと対峙する「ロシアの小僧っ子」として描かれるのだ。我々はこれを今まで、イワンやスメルジャコフやアリョーシャのドラマの内に確認してきたのであるが、ドミートリイにおいて「餓鬼の夢」から始まった、新たな宗教的認識の深化と覚醒のドラマもまたこのような文脈の中で、つまりはこの青年がイエスの十字架に正面から向き合うまでの旅の出発点として位置づけられ、表現されることを次の5で確認しよう。

最後に改めて確認しておくべきことは、ドストエフスキイがこれらの若者たちを決して完成体として描くことはなく、それぞれの成長史の中に置いて描いているということだ。兄弟四人はそれぞれが皆未熟で未完成な探究者、あるいは求道者としての「ロシアの小僧っ子」であり、自らの生の中で出会う「罪なくして涙する幼な子」を前にして、時には天使的な存在として、あるいは逆に恐るべき悪魔的反逆者として、そして時には能天気で冷酷な若旦那として思索し行動する。このように彼らは、各人各様の試行錯誤を繰り返しつつ、またそれぞれの「何故だ？」「何のために？」の問いを発しつつ、全員が何らかの形で「父親殺し」という悲劇的悪魔的なドラマに関わり、イエス・キリストの十字架を前にして、激しい過誤と覚醒、叛逆と没落と甦り、そして罪と罰と赦しの軌跡（ドラマ）を紡いでゆく成長体として描かれているのである。

最後にこの「魂の成長史」という角度からドミートリイに光を当て、本章を終えることにしよう。

6.ドミートリイの新たな曠野　　―遠きに輝く「太陽」―

地底からの讃歌

モークロエ村での逮捕拘束と予審から二か月。いよいよ公判を明日に控え、収監されたドミートリイの魂は高揚していた。今日も訪れてくれたアリョーシャを前に、彼は監獄に閉じ込められたこの二カ月間に、自分の内に如何に「新しい人間」が甦ったかを熱く説き始める。その脳裏になお強烈に焼き付けられているのは、予審の終り近くに見た「餓鬼の夢」である（九８）。この夢がなお、彼の魂を何処までも天翔けさせ続けるのだ。―― 今思えばあの夢は「予言」として与えられたのだ。自分はあの惨めな「餓鬼」のために徒刑に赴く。なぜならば我々人間は誰もが万人に対して罪があるのだから。そして誰もが「餓鬼」なのだから。自分は父親殺しの犯人ではない。だが行かねばならない。引き受けるのだ！モークロエで「餓鬼の夢」に続いて臨んだ「新しい呼び招く光」とは、自分を遠い流刑地の地底に呼び招く「光」だった。だがそれは地底においても輝き続ける「光」であり、「太陽」であり、「神」なのだ。我ら地底の人間は、喜びを司る神への悲劇的な讃歌を地底からでも謳うであろう！神とその喜びよ、万歳！俺は神を愛している！ 太陽の存在を知っていること、それが生の全てなのだ（十一４）。

獄中で謳われるドミートリイの「喜びの歌」。それはアリョーシャを相手に語られた「熱烈なる魂の告白」(三３・４・５)の延長線上にあり、あの悪夢のような金策の旅（八１・２・３)、そして予審での「魂の苦難の歴史」(九３・４・５)、これらを経て行き着いた「餓鬼の夢」という「感動」体験の言語化と言えるであろう。あの「新しい呼び招く光」とは神来の「光」であったと捉えられ、その神に向かって高らかな讃歌が謳われたのだ。この讃歌の内には、なお生来のあのロマン主義的心情が強く鳴り響いている。だがそれのみではない。ここには「父親殺し」の試練を契機として、彼の心に生まれつつある「新しい人間」の息吹も確かに脈打っている。

罪意識

この新しい息吹を示す決定的な要素とは、何よりも彼の罪意識であろう。つまりあの「餓鬼の夢」から与えられた「感動」、つまり魂の根源的な原感情から噴き出てきたのは、あの「黒い不幸」に対する痛切な罪意識だったのである。「新しい呼び招く光」はドミートリイに、人間の宿す罪を他ならぬ自分自身の罪として認識させ、中でも「最も卑劣な悪党」である自分をその罪を贖う生に捧げよう、地上に満ちる惨めな「餓鬼」たちのため、「黒い不幸」のために十字架を負おうとの決意を生まれさせつつあるのだ。これはゾシマ長老が繰り返し説き、ゾシマの兄マルケルが死に臨んで語った「万人万物一切への罪」にそのまま通じる罪意識と、その罪意識に立つ新たな生への意思に他ならない。

神を前にして、自らを含めた人間が持つ根源的罪性に目覚めたドミートリイ。そこから神と生への熱い信と愛を高らかに謳うドミートリイ。―― この彼にとり、監獄を訪れては神の不在を説き聴かせるラキーチンの「干乾びた心」も、「スフィンクス」の沈黙の内に留まるイワンの不可解さも、そして父フョードルの脳天を叩き割ったスメルジャコフの悪魔的精神も、全てが神への畏れを知らぬ罪深き精神でしかない。「天使」アリョーシャも、この「新しい人間」ドミートリイが説く感動的な神への讃歌に耳を傾け、以前にも増して天翔けるその熱弁に決して口を挟むことはない。

だが果たしてドミートリイは、真に「新しい人間」として甦ったのであろうか。「新しい呼び招く光」は彼をして本当に神と出会わせ、「万人万物一切への罪」の意識を魂の底に植え付け、イエスに従って己の十字架を担う道を歩み始めさせたのであろうか。

ドミートリイに射す影

ドミートリイの魂の高揚。そこに射す暗い影をアリョーシャが察知するのは、兄が逃亡計画のことを口にした時である。スメルジャコフとの対決により自らの父親殺しの罪意識を深めてゆくイワンが、その罪意識を贖うべく、あるいは覆い隠すべく、グルーシェニカを伴ったドミートリイのアメリカ逃亡を密かに画策していたのだ。イワンはドミートリイの「地底からの讃歌」について知っていた。兄が監獄で神への讃歌を謳い、「万人に対する罪」のために、また「餓鬼」たちのために地底に赴こうという「十字架」への決意を熱く

語ることも十分に承知していた。だが父親殺しについて、なお自分自身の罪の最終的な自覚を拒むイワンの無意識は、「万人に対する罪」を説く兄ドミートリイが、結局は「十字架への道」を捨て去り、グルーシェニカを伴っての逃亡計画を受け入れることを期待し、また確信もしていたのである。事実ドミートリイ自身も、自分がグルーシェニカなしの流刑生活など耐え切れないだろうこと、自分が「十字架から逃げ出す」であろうことを予感し、「讃歌」の一切が無となることを怖れ、この不安をアリョーシャに表明するのだ(十一４)。「旦那ドミートリイ」のアイデンティティはなお依然保たれ、「喜びの歌」「地底からの讃歌」を高らかに謳うに至ったこの長兄もまた、弟のイワンやスメルジャコフと同じく、なお「重い病」の内に沈む一人のカラマーゾフだったのだ。

ドミートリイへの「裁き」

公判の結果は「誤審」、「我を通した百姓たち」による有罪宣告であった(十二１４)。だがこの百姓たちによってなされた「誤審」とは、結局「旦那ドミートリイ」に下された逆説的な神の裁きだったとも言い得るであろう。つまりこれは、彼が真に「万人万物一切への罪」を自覚し、真に己の十字架を担う存在となるべくなされた判決、ロシアの民衆と神からの有罪宣告であったと考えるべきであろう。事実ドストエフスキイは作品終局の「エピローグ」で追い打ちをかけるように、「天使」アリョーシャをしてドミートリイに対し、もう一つの厳しい宣告を言い渡させるのである。この宣告については前回の最後に見てあるが（第４章6)、以下にもう一度確認しておこう。

懲役二十年の流刑を宣告され、シベリア送りがいよいよ現実のものとなるや、案の定ドミートリイは、既にイワンが手を回していた流刑地への護送途上での脱走と、グルーシェニカを伴ったアメリカ行きのことを口にし始める。現実に始まった看守の「貴様呼ばわり」に我慢ならないこの旦那は、ましてグルーシェニカなしの生活など想像することさえ耐え難いのだ。カチェリーナとの愛も彼の心から消え去ることはない。実際ドミートリイを挟んで、グルーシェニカとカチェリーナとの間には、新たに嫉妬ゆえの熾烈な鍔(つば)ぜり合いも始まっている。この兄を前にして、アリョーシャは宣告するのである。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」
（エピローグ２）

アリョーシャにとり、兄が真に「十字架を負う」に至るまで、これから歩まねばならない「ゴルゴタへの道」は長く険しいものなのだ。ドミートリイの内になお広がる「裸形の曠野」を見据えた見事な宣告である。

最後に我々は、書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』後編への一つの視点を得るためにも、そしてこの作品が主人公たちの「魂の成長史」として描かれていることを確認するためにも、酷なようであるが、ドミートリイについて筆者が冷徹に刻む二つの事実、

彼の原罪性とも言うべき旦那性が刻印された二つの事実を確認しておかねばならない。

原罪性の根（1）、スネギリョフ・イリューシン父子に対して

忘れてならない一つは、前回我々がアリョーシャと共に追った「垢すりへちま事件」である。ドミートリイによって髭を掴まれ、公の面前を引きずり回された退職官吏のスネギリョフとその家族、殊に息子のイリューシンが投げ込まれた屈辱と絶望について、そもそもドミートリイはどれだけこの事実を把握していたのか。「喜びを司る神への悲劇的な讃歌を地底からでも謳うであろう！」。こう感激と共に叫ぶドミートリイの耳の底に、「放して、放して下さい。これは僕のパパです。パパなんです。赦してやって下さい」(四７)、彼に取りすがって哀願したイリューシンのこの叫びは些かも響いていなかったのであろうか。「十字架を負い」罪の贖いの旅に出るというドミートリイが、まず「赦し」を求めて跪くべきは、抽象的「万人万物一切」に対してでも、また彼の内深くのシラー的曠野で泣き叫ぶ「餓鬼」に対してでもなく、まずは家畜追込町の「穴倉」の一角で悲しみの内に世を去ったイリューシン少年に対してではなかったか。

「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」。イリューシン少年が父親に向かって叫んだこの悲痛な叫びもまた、ドミートリイには響いてはいなかったのだ。これに対して、少年の叫びを自分自身の胸の痛みとして受け止めたのはアリョーシャである。イリューシン少年の悲しみと苦しみに日々寄り添い続けるアリョーシャには、監獄で高潔かつ高貴な決意を語る兄ドミートリイが、この少年の具体的な悲しみと苦しみを視野に入れていなかったことは、熟知していたのだ。作品の終局、「イリューシンの石」の前で少年の叫びがよみがえり、彼が襲われた「戦慄」の痛ましさが改めて浮かび上がる。少年が叫んだ「あいつ」とは、彼の兄ドミートリイに他ならなかったのだ。

ドミートリイはゾシマ長老の面前で、父親のフョードルからこの事件のことを暴露されるや、語っていた。「今僕はこの野獣のような怒り方を悔いていて、自分が遣り切れないくらいです」(二６、第４章3)。だがこの「遣り切れなさ」とは、飽く迄もドミートリイ自身の恥辱感であり、ここには侮辱された相手スネギリョフは存在せず、彼への思い遣りも一切ない。また彼は予審の場でも、自分がこの一か月ほど荒れていて、料亭「みやこ」でスネギリョフと喧嘩をしたのも、また父親フョードルを殴ったのも、全てカチェリーナの三千ルーブリのことで自分を責めていたからだと弁明する(九７)。ここにあるのも例によってまた、自分自身の「名誉と誇り」へのこだわりでしかない。この青年は自分が起こした事件が如何に深くスネギリョフの心を傷つけ、その息子イリューシンの心をも如何に残酷に切り裂いてしまったか、そしてその末にこの少年が如何に深い悲しみと苦しみの内に死を迎えたか、これらのことを知った形跡はどこにもないのである。

この作品の「エピローグ（３）」において、アリョーシャが襲われた「戦慄」については今も言及し、前回も我々はこのことを中心に考察した（第４章6）。その際に指摘しなかったのだが、筆者はこの葬儀の場に、亡き少年のためにカチェリーナとリーザとが花束を贈

ったことを記している。イリューシンの墓もカチェリーナの手配によるものだ。ところが肝心のドミートリイについては、彼がこの少年の死と葬儀に対して如何なる反応を示したのか、筆者は何も報告しない。世に満ちる「黒い不幸」、泣き叫ぶ「餓鬼」たちのために「地底」に赴くと高らかに宣言するドミートリイは、イリューシン少年との悲痛な叫びと苦悩を知ることも贖うこともないまま、ましてその家族の悲しみも苦しみも知らぬまま、つまりその原罪性の根は断たれることのないままに、この物語の前篇は終わるのである。敢えてもう一度、アリョーシャの言葉を挙げておこう。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」

原罪性の根（２）、スメルジャコフに対して

ドミートリイのスメルジャコフに対する姿勢についても、改めて考えてみよう。イワンと同じく、否、イワン以上に一貫してスメルジャコフに無関心で高圧的な態度をとり続け、同時にまた極めて無警戒な若旦那であり続けるのがドミートリイである。

彼がアリョーシャに自分の窮状を訴えた「熱烈な魂の告白」を思い出そう。ここで彼はスメルジャコフが与えた情報として、フョードルがグルーシェニカを自宅におびき寄せるべく、密かに三千ルーブリの提供を申し出ていると告げていた。これ以外にもフョードル宅訪問時のノックによる合図も、また三千ルーブリの隠し場所も、全てスメルジャコフがもたらした情報であり、ここにいるのはドミートリイを父親殺しに追い込もうと、着々と歩を進めるスメルジャコフである。ところがこの若旦那は夢にも下男の情報操作などに思い至ることはない。ドミートリイにとりスメルジャコフとは、大旦那フョードルと若旦那たる自分との間で「こうもり」のように身を処す、小心翼々とした下男以外の何者でもないのだ。

父親が殺害されたことを聞かされた瞬間、直ちにドミートリイが思ったのはスメルジャコフのことであった。予審の間も、この直観自体が斥けられることはない。ところがドミートリイの内には、この下男の犯行など決して信じようとはしないドミートリイもいたのである。それは彼が持つスメルジャコフについての先入観、あるいは「信念」「印象」のなせることであった。この興味深い事実に関して、取調官たちに対して彼が語るスメルジャコフ観、正確には犯人としてのスメルジャコフを否定する彼の論拠に耳を傾けておこう。

「［僕がスメルジャコフを犯人でないと確信する理由は］信念によってです。印象によってなのです。スメルジャコフとは根性がこの上なく貧しい奴で、臆病者だからです。臆病者どころか、これは世界中の臆病という臆病がかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです。奴は雌鶏から生まれたのです。僕と話をする時には、僕が手など振り上げもしないのに、僕が殺すのではないかと毎度震えているのです。僕の足元にひれ伏して泣き、僕が正に今履いているこの靴に接

> 吻しては、僕が奴を《脅さないように》と、文字通り哀願するのです。いいですか、《脅さないように》とですよ。―― これはまあ、何という言葉でしょう？ ところが僕はあいつに贈り物さえ提供していました。あいつは頭の弱い、癲癇持ちの、病弱な雌鶏です。八歳の子にでも叩きのめされてしまいますよ。果たしてこれが一人前の男でしょうか？そんなわけで、皆さん、［父親を殺したのは］スメルジャコフではありません。それにあいつは金を好きではないのです。僕が提供した贈り物も一切受け取ろうとはしません・・・奴に老人を殺す理由があるでしょうか？ それにあいつは、ことによると親父の息子、私生児かもしれないのです。このことをご存知ですか？」（九５）

「これは世界中の臆病という臆病がかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです」。ドミートリイがスメルジャコフを一語で要約した「臆病」という言葉は、「呪い」とされるべきであろう。――「これは世界中の呪いという呪いがかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです」。この呪いの人スメルジャコフに半ば気づいていたのがイワンであり、正面から向き合ったのがアリョーシャであることは、今まで見てきた通りである。

スメルジャコフについてドミートリイが持つ「信念」ないしは「印象」と、その実像との間に存在する隔たりは驚くべきものがある。下男が如何に的確に若旦那を把握し、また如何に巧妙かつ慎重にこの若旦那を欺き、自らの運命への復讐劇に巻き込んでいたか、改めて我々は愕然とさせられる。また逆に、若旦那が如何に下男を理解せず、また如何に能天気かつ無警戒にその策略に嵌まっていたか、これもまた同じく信じ難いものがある。二人の関係は飽くまでも若旦那と下男の関係であり、そこに血の繋がる異母兄弟としての人間的な関係は存在していなかったと判断せざるを得ない。

我々は先にマリアとの逢瀬の場でスメルジャコフが、イワンばかりかドミートリイについても厳しい批判と軽蔑の心を表明するのを確認した（1）。スメルジャコフにとりドミートリイとは、品行の点から言っても、頭の程度の点から言っても、また懐の中身の点から言っても、どこの下男にも劣らぬほど「空っぽ」であるくせに、誰からも尊敬される若旦那として軽蔑と嫌悪の対象でしかなかったのだ（第１章3、第２章6）。これら二人の異母兄弟、若旦那と下男との間に存在する隔たりは、他のどの兄弟との間にある隔たりよりも大きかったと言うべきであろう。スメルジャコフの運命に対する復讐劇は、このドミートリイも巻き込んで着々と進行していったのである。またこのことなど露知らず、ドミートリイのグルーシェニカへの情熱はますます燃え盛り、父親フョードルとの確執はますます激しいものとなっていったのだ。

この延長線上にあるエピソードが、その翌日法廷でのドミートリイの言動である。スメルジャコフの思惑通り「父親殺し」の罪で逮捕に追い込まれた彼は、予審での混乱からも抜け出て、今や最初の「直観」通りスメルジャコフの犯行を確信するに至っている。この

彼が、裁判の冒頭スメルジャコフが自殺したことを知らされるや、叫ぶのだ。

「犬には犬の死にざまがあるのさ！」（十二１）。

この叫びの内に、スメルジャコフに対するドミートリイの姿勢の一切が凝縮されたと言っても過言ではないだろう。

若旦那と下男、二人の兄弟の隔たりは決して埋まることなく、断層は大きく剥き出しのままに残される。ここでもドミートリイの原罪性の根は断たれることのないまま、『カラマーゾフの兄弟』の前編は終わるのだ。

ドミートリイとは対照的に、スネギリョフ家の一人ひとりに対して、兄が加えた侮辱と苦しみを代って贖おうとするかのように、深い愛と心遣いとを示し続けるのがアリョーシャであることを、ここで再度確認しておこう（前回第４章）。「十字架を負うことはまだ無理です」。このドミートリイに対する宣告の内に読み取るべきは、兄の奥深くに根を張る原罪性を見つめる弟の冷徹なリアリズムであり、また師の遺訓に従い新たな道を歩む「実行的な愛」の人の毅然たる姿である。そしてこのアリョーシャの背後に我々が認めるのは、「ロシアの小僧っ子」たるカラマーゾフの兄弟たち一人ひとりに即して「神と不死」との対決のドラマを紡ぎ、「十字架への道」の方向であれ「絞首台への道」の方向であれ、それぞれの魂の成長史を誤魔化しなく刻む作者ドストエフスキイその人である。

「罪なくして涙する幼な子」

第１回目から本章の4に至るまで、我々は、『カラマーゾフの兄弟』における「罪なくして涙する幼な子」に焦点を当て、スメルジャコフとイリューシンこそその「幼な子」に他ならないと考え、様々に検討を重ねてきた。この角度から見る時、自らが追い込まれた苦難の中で世に満ちる「黒い不幸」「餓鬼」たちの存在に目覚め、この「餓鬼」たちを生む人間の罪を自らの罪とし、その罪を贖うべく「十字架を負って」生きる決意に至ったドミートリイとは、正に「罪なくして涙する幼な子」たちを見据えて「新たな生」を歩み始めた人物に他ならない。ドミートリイとは、ある意味で究極の認識に至ったのだ。

ところがイワンと同じくドミートリイもまた、自分の最も身近に存在する「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフもイリューシンも、その視野には入れていないのだ。ドミートリイの原罪性はなお深く彼の内に根を張り、彼がその内に抱える裸形の曠野はなお荒漠たるものがあると言わざるを得ない。「兄さんには、十字架を負うことはまだ無理です」。改めてアリョーシャが発したこの言葉とは、正にこのドミートリイに向かって投げつけられた厳しい断罪の宣告であると考えざるを得ない。

だが最後にドミートリイのもう一つの面も確認しておこう。三千ルーブリを求めての二日間の旅から始めて、我々はドミートリイについて、読む者を辟易とさせる遍歴の旅、悪

夢のような様々な大騒ぎ（カーニヴァル）を取り上げてきたのだが、これらに共通するドミートリイの在り方とは、能天気で許し難い旦那性と結びついた原罪性と同時に、底抜けの爆発的生命力と結びついたシラー的ロマンチズム、更には芸術的宗教的豊饒性であった。作者ドストエフスキイはドミートリイに、アリョーシャの厳しい宣告を以って断罪し去るには余りにも豊かで奥深い生命力を与え、この存在を圧倒的かつ見事な情熱の爆発体として描き、それと共に芸術的豊饒性と思想的深遠さを与えていることも決して否定出来ないのだ。「はじめに」で記したように、恐らくドストエフスキイその人の生地、その生命の爆発的在り方と芸術的宗教的在り方とを、つまりは作者自身のカラマーゾフ性を最も端的直截に映し出す人物がドミートリイと思われるのである。

我々は今回試みた方法、ドミートリイの分裂・矛盾に分け入り、そこから「ロシアの小僧っ子」としての彼の成長史、つまりはその宗教的成熟に向けた歩みを読み取るというアプローチが、『カラマーゾフの兄弟』の本質を捉え、ドストエフスキイの思索の核心を浮き彫りにする上で不可欠のものと信じるのだが、決してこれでこの見事な生命の爆発体の全てを捉え切ったとは考えない。時が経ち、また別の機会を与えられた際には、本論とは別の切り口からこの作品にアプローチを試み、より豊かで鮮やかなドミートリイ像を浮き彫りにすることを期したいと思う。

（第５章、了）